

翌日、出勤した山口は施設長室に向かう途中で秋野に呼び止められた。秋野の隣には医事課の松下がいた。

「ちょっといいですか。お伝えしたいことがありますて」秋野が言った。

山口はうなずいた。「どうぞ」

「ここでは話せませんので会議室に来ていただきますませんか」

三人は会議室に入ると椅子に座ることはせず、ドアのそばで立ち止まった。山口は向かい合うように立っている二人に言った。「で、伝えたいことって」

「実は職員から聞いた話なんですが」秋野が小声で言った。「藤田さんが自殺した日に事務長が藤田さんの部屋に行っていたようです」

「事務長が？」

「おそらく滞納の件かと」

「滞納？」

「はい、藤田さんのご家族は利用料四ヶ月分を滞納していたそうです」

「え？ それを事務長は藤田さんに伝えに行ったと」

秋野はうなずいた。「多分」

「あと」松下が言った。「事務長が私にこう言いました。藤田さんのことを終わりにさせてやるって」そう言うと、松下の身体が震えだした。「そして、藤田さんが亡くなりました。きっと事務長が仕向けたに違いありません。私、怖いです」

「それに」秋野が話を繋いだ。「事務長は藤田さんから大事なネズミを目の前で取り上げ、処分したそうです。きっと滞納の……腹いせかと」

山口は目を見開くと彼の表情が次第に怒りの形相に変わっていった。「あの野郎」その声は、怒りからくる唸り声だった。「自殺の原因はあいつか」

「許せません」秋野が強い口調で言った。

「秋野さん、このことは現場職員は知っているの」山口が訪ねた。

「多分、詳しくは知らないと思いますが、いずれ現場職員も気づき、広がるでしょう。どのように伝わるか分かりませんが、時間の問題です」

「こんな怖い環境で働きたくないです」松下は未だに震えていた。

秋野が松下に顔を向けてうなずいたあと、山口に顔を向けた「いずれこんな施設に嫌気がさす職員が出るでしょう」

山口は苦虫を噛み潰したような表情を見せた。金のことしか頭にない事務長。利用者の

心配より施設の体裁を気にする施設長。こんな職場環境なら現場に噂が広がれば職員の不信感が広がり浮き足立ってしまうのは当たり前だ！

「介護長」秋野の目が涙ぐんでいた。「こんな時だからこそ、ブレない軸が必要です。その軸は介護長、あなたです。職員達に安心感を与えて下さい」

山口は目を閉じてゆっくり深く深呼吸し怒りの衝動を落ち着かせると秋野を見つめた。彼女はうつむき、肩を落としていた。山口はその姿を見るや、以前の自分を見ているように感じられた。困惑、不安という底なし沼に入り込み、弱腰になっていた自分……。

山口は秋野に言った。「今の俺は前とは違う。こんな時になにをすべきか。俺が堂々と振舞うじゃないか」そう言うと山口はうつむいた秋野の肩に手を添えた。「大丈夫、この局面を必ず打開する。秋野さん、俺は介護のプロであり介護職の責任者だ。利用者、介護職員を守る為に俺はこの施設にいる。俺は船首に立ち、進む道を示していくよ」

午後、小久保は小早川に呼ばれ、彼女の部屋を訪れた。

「こちらに」小早川は部屋に来た小久保を招き入れた。

「あなたにお伝えしたいことがあります。藤田さんの件、ご存じ」

「ええ」

「亡くなった理由も」

小久保は目を閉じてゆっくり何度もうなずいた。

「そうでしたか……こんな悲しいことが起きるなんて」

「小早川さん、そのことは職員から聞いたのですか」

「聞いたわけじゃないわ、いつものように聞こえてきたの。職員同士の会話でね。どうやら事務長が圧力をかけたって噂よ。それを知らせようとあなたをお呼びしたの。小久保さん、もしかして、あなたも知っていた」

小久保はうなずいた。

「他の施設は知りませんが、あの事務長がいる間は、この施設で生活している皆さんに幸せは訪れないわ。あなた流に言えば、抑圧された生活、事務長に怯えながらの日々しか残されていない」

小久保は硬い表情のまま小早川を見つめている。

「小久保さん」小早川は察した。「決心したのね。このままで済ませたら、あなたのような人にとっては生き恥をさらすようなもの」

「明日の午後、事務所を占拠する」小久保の声は静かだったが、彼の力強い意志は小早川に伝った。

小早川は驚きもせず、静かにうなずいた。そして筆筒の上に置いてあるフォトスタンドを見た。「小久保さん、私の夫は先の戦争、大東亜戦争で駆逐艦の艦長だったの。終戦を迎える前、夫の駆逐艦は帰りの燃料を持たないで沖縄の海に向かいました。当然、夫は二度と帰れないことは承知していました。それでも何の迷いもなく沖縄の海に行って散りました。私は夫を誇りに感じています。立派な軍人として、夫として。彼は信念を持ち、負け戦と分っていても胸を張り、臆せず堂々と進んで行きました」小早川は顔を小久保に向けた。「今のあなたはあの時の夫を思い出させます」

「私の他に仲間が二人います。佐々木と織田です」

「頼もしい限りです」

小久保は車イスから立ち上がり始めた。片麻痺の身体だが、うまくバランスを保ちながら立つことができた。「あなたに感謝したいことがあります」

「私に」小早川が尋ねた。

「ええ、今日の午前中、あなたが私を部屋に誘ってくれた」

小早川はうなずいた。

「あの時、あなたに背中を押されなければ、きっと私はこの先もただ吠えているだけのうるさい高齢者で終わっていました」

小早川は姿勢を正して小久保の話を聞いていた。小早川には小久保の姿と夫の姿が重なって見え始めていた。

「あなたに会わなければ、私は自分を見失っていたかもしれません。そして常に道に迷って彷徨っていたでしょう。ありがとうございます」小久保は小早川に向かって一礼した。しかし、片麻痺の身体のため、身体を少ししか傾けることができなかった。

小早川は目を見開いた。今の小久保がはっきりと夫の姿に見えたのである。「あなた」

小久保は身体を戻し、車イスに座った。「それでは失礼します」小久保は車イスの向きを変えようとしたと時、小早川が呼び止めた。

「あなたに差し入れをしたくなりました」

「差し入れ？」

「ええ、夫が身に付けていた短剣です」

小久保の身体に緊張が走った。そしてゆっくりとした口調で尋ねた。「短剣でなにをしろ

と」

「お守りとして持っていたきたいの」

小久保は安堵した。そして笑顔を見せながら言った。「それがあれば百人力だ」

「きっと主人が手助けしてくれます」

小久保はうなずいた。「で、その短剣はどちらに」

「今は手元にありません。でも、明日お渡しできます。今日はこれから娘と一緒に夕食を食べに行くことになっていましてね、そして今夜は自宅に泊まり明日戻ってくる予定です。なので明日の午後にはお渡しすることができるでしょう」

小久保はうなずいた。

「一つだけ約束してください」

「何でしょう」

「人を傷つけないで欲しい」

「当然です。決して人を傷つけたりはしません。占拠するためだけに使うことを約束します」

小久保はあらためて礼を言い、部屋から去って行った。

小早川は夫の写真を見つめた。「あなた、いよいよ始まります。この風が消えずに進みますよう、どうかお守り下さい」次に柱時計を見つめた。「お父様、あなたが新しい時代を刻もうとしたように、今、男達が新しい時を刻み始めました」

小早川は夫の視線を感じたかのように、再び夫を見つめた。「ええ、分かっています。もうひと仕事でしょ。忘れていませんわ」